



天相衣

下



~ 13
2933
2 下





白良の遺金を掘り出す所

あしりくる。

○初花手ちるなるうづち

さて月比をしく霜月よあひぬけ月へ三種の明神の伝まらり
 とて国のうちもさつて其まらけをあたひ祭の日にさしたる
 系諸の人まがくゆきうひて錐をころもあゝ思良は日夜
 服らひし出立て伝社又詣てあんとさるおくら向ひより
 貴人と見えて無物も供人あまの付をひてけ伝社をさして
 来るの思良は無物の伝を見せだ十五ちと見ゆる娘の顔かせ
 よのしおあしぎ美しきが窓よりの籠を出しをり思ひあや

いせを見らやうあはだ思良膽心もらせてあたま美人のあはる
 人を得てあそ事ともまがく思ひてしきさみあくるるど
 無物も伝社のかゝ行る途よひまらして侍男の供ちるあり
 かの伝をいし国の守の伝らちの者よ思良がさつる男あまに
 とめてあま物うちらひて無物よるる何んぞいふに
 彼男登つてあまを北の方の伝めその娘あまに北の方
 ちかみわみひて常かこつたあまにさしひらり
 ちかみ北の方の伝かこりよかの娘明神よまらるるあま
 し思良らちひけよしよま事あゝあなだ侍よむらむ

入はるよしをゆきまのしう井田ひん思良が事をだつてみて
 いさざりたる尾けやしきをさより外の方へ逃生するがら
 々道も見えず設て庭の池まきづつ流れてゑぐる守るをだ
 まづ獄よりまきづつ井栲回まづ尾とあるまじく
 人をもちびまいる事みくさきで死はきだせんか
 死骸の親族のものつうまきづつこのものふ尾が親族
 夜中まききて死骸を曳子のしき尾が奪つ早ありたる
 夜たるのぐと明ぬさくおめさきある事よとて
 の事とりとて日暮をまき野田に隠しんやとてこの

まきくまきまきくまき

○尾法師の娘の君

磯田が家あてらかる事をまきづかぬて志太にかきひく
 々々娘小松をおうつうまきづつ其用意まきづつ
 小松がうけひらなるをまきづつ母期まて娘のしるさおき
 幼き時自良よかづま約束はまきだ守せらぬか
 おまきづつ母もろまきづつ三保の家も義もまきづつ
 だ父君を我いさめて見まづの定をあしめてまきづつ三保の
 家におまきづつをおうつうまきづつとらぬ娘を傷ありとら

まゝで昼より用意して。うらを待たり。さて酉時。さう
 小松を曳子のせて。買ども。あま。ほま。そびて。出行。田舎の
 あま。み。か。る。時。た。ま。あ。松。を。い。も。あ。も。
 つ。ね。て。あ。け。を。昼。め。も。お。し。ぎ。道。い。あ。く。照。こ。い。ぬ。り。
 ま。ら。の。省。を。出。て。十。町。な。り。行。ぬ。と。ち。の。ふ。は。係。は。時。雨。ふ。り
 ま。り。て。も。の。つ。ね。松。も。一。時。は。ま。え。ぬ。雨。と。車。軸。を
 流。さ。な。り。降。ま。さ。り。て。渡。ぐ。う。も。あ。ぬ。だ。皆。々。森。を
 中。へ。り。て。雨。の。は。げ。る。を。ま。り。ま。さ。い。よ。と。こ。ま。り。あ。り。物。の
 しろ。め。も。見。え。さ。い。家。を。帰。り。て。火。を。取。り。て。来。ん。と。い。ふ。借。人

介ても。家。は。帰。ん。と。の。事。を。と。い。ひ。て。森。の。中。へ。あ。ひ。て
 を。あ。り。え。ぬ。あ。ま。の。人。お。と。て。何。物。を。か。づ。ま。い。ま。り。回。り
 森。の。中。へ。走。り。入。り。ぬ。と。て。お。そ。ろ。し。ま。い。雨。も。あ。ま。り。さ。り
 ぬ。と。憩。あ。ん。と。の。よ。く。な。り。た。何。の。あ。ら。ま。い。し。ぬ。その
 中。へ。一。人。が。云。々。を。あ。ま。り。の。あ。ま。事。を。ま。り。ぬ。あ。け。森
 を。昔。よ。り。化。物。出。て。人。を。あ。ま。り。あ。い。ぬ。と。い。ふ。は。い。ぬ。
 よ。か。し。ぬ。あ。り。入。り。ぬ。事。よ。り。ぬ。と。い。ふ。は。い。ぬ。た。ま。だ。か。く
 人。あ。ま。り。の。あ。ま。り。化。物。も。よ。り。出。て。あ。ま。り。か。ら。い。ぬ。
 た。ま。あ。る。風。樹。を。う。ら。ま。り。吹。ま。さ。い。ぬ。あ。ま。り。ぬ。



志^しの^ご長^{ちやう}者^{しゃ}の^ご姫^{ひめ}の^ごこ^こを^を
 あ^あけ^けて^て見^みえ^えを^を尼^{あま}の^ご死^し骸^{がい}
 何^{なに}を^を足^あて^て敬^{かしら}ろ^ろく^くお

天の目

天の目



志をんあくもあをわ
 下女雲井三保の浦にて
 白良子あは小松を
 天女と現れ羽衣を
 別きて天母
 のちうら



よもひなすうしひてん。と云々。財を口くちあててやせび
 のこのをうよ。しんあもをせせう。黒良今も白良が恩日
 あく。うき。か。別意あり。か。ひ
 よろづ。白良が指揮を受けてまゆらつとく。磯田夫婦
 白良が庭の内。別子。養つらりて。まはせ。跡意なく。養ひ
 々々。夫婦も感涙をあら。つ。さて。あん。専修の念佛者
 とあり。世をさ。く。く。年ごろ。忠をつく。せる。者あり
 せ。今。家のあ。く。も。を。せ。う。つ。き。造り
 せ。せ。つ。つ。た。の。老を。養。せ。

三保の家。海。富家。あり。子孫。あ。え。る
 三保長者が。陰徳の報。白良が信義の公。
 小松が貞操のさる。あ。く。ひ。子。天人の加護。よ。ね。り。と
 語。は。く。と。あ。ん。

天羽衣下終

天の羽衣下終

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. It consists of several lines of text, with some words or phrases written in a larger, more decorative hand. There are several small, illegible markings or symbols interspersed throughout the text, possibly representing specific characters or abbreviations. The overall appearance is that of a well-preserved but aged piece of paper.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a dark ink on aged, yellowish paper. It consists of several lines of text, with some words or phrases written in a larger, more decorative hand. There are several small, illegible markings or symbols interspersed throughout the text, possibly representing specific characters or abbreviations. The overall appearance is that of a well-preserved but aged piece of paper.

Small handwritten text or marginalia located at the bottom left of the page, possibly a date or a reference.

